



★2★

渡辺 大直

新温泉町立照来小の子どもたちが但馬牧場公園にやって来た。同校では3年生の地域学習として毎年、牧場公園で

「赤ちゃんはお尻から生まれ、生まれた時はぬるぬるしている。出てくるとき赤ちゃんはほかほか」「生まれた時は立ってないけど、すぐ立つとする」

但馬牛について学ぶ。牛を飼っている家の子はほとんどいないので、まず牛を知り、接するところから始めようと、担任教諭と打ち合わせていた。

テレビや本で紹介されていないようなことをたくさん知って、そうした知識に基づき質問が並んでいた。

ところが、牛について知っていること、知りたいことを児童が書いた文章を読んで驚いた。「角は空洞になっていて」「目は青か黒」「後ろに行くと驚かせると蹴られる」

子どもたちに聞くと「おじいちゃんが牛を飼っている」「親戚が飼っている」「近所で飼っている」「友達が言っていた」という答えが一斉に返ってきた。

「黄土色の粉みたいなのを食べる」「磁石を食べることがある」「骨が折れたら治らない」

周りの大人から聞いたり、親戚や近所の牛舎で見たこと、学校で友達と話したことが知識を形作っている。子ども

もたちが知りたい質問は150項目を超え、牛に親しみを持っていると感じた。

全員が牛に触り、楽しそうにブラッシングをした。「こ

れって文化かな」と思う。照来小学校区は、但馬牛の故郷ともいべき地域だ。その血統をたどると、旧小代村と照来村、旧城崎郡の奥佐津から

奥竹野一帯の牛に行き着く。

牛を飼う農家は大きく減ったが、照来地域にはまだ比較的多く残っていて、牛を飼った経験のある人も多い。周りに牛の話ができる大人や、ちよっとのぞける牛舎がなければ、子どもたちにこんな知識は受け継がれなかっただろう。

サッカー女子ワールドカップで準優勝したなでしこジャパンの宮間あや主将が「女子サッカーをアームから文化に変えたい」と語った。但馬牛も「世界のK O B E B E E F」として年々輸出量を増やしている。但馬牛に文化があるとすれば、これを大事に伝えることにより、将来の担い手や応援団が育つかもしいない。秋にもう一度ある地域学習には、そんな気持ちで臨みたい。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

牛の文化根付く照来地区



但馬牛に触れる照来小の児童。さまざまな経験を通して牛に親しみを覚えている